

目的 個人要因をふまえた温熱的快適条件の設定を目ざし，すでに二，三の知見を明らかにした。本報では，温熱的に快適な着衣量の個人差を追究するに当たって，環境気温および生理的要因による影響をふまえた上での表示値（標準化着衣量（SDC）と呼ぶ）の算出を試みた。

方法 対象者は小学校5・6年の学童（大阪府下の公立10校からクラスを無作為抽出）および市役所などの事務職員（大阪府下の15オフィスから抽出）で，同一人について秋と冬の2回調査を行った。有効サンプル数は，学童：3014，成人：1680である。おもな調査項目は，着衣量，温熱感覚の申告，オフィスおよび教室内の気温，気湿，気流などである。生理的要因には，性，年齢，肥満度（Rohrer index）を取り上げた。

結果 1) 次式による標準化着衣量（SDC）の算出法を考案した。

$$SDC = AC - \sum Wij$$

AC：実際の着衣量，Wij：標準化を行う要因アイテムiに与える補正值

標準化が必要な要因アイテムおよび補正值は，数量化理論第1類による解析結果を適用する。要因アイテムは，成人ではオフィス内気温，年齢，肥満度，学童では教室内気温，肥満度であった。2) 得られたSDCを二，三の実例に適用し，その有効性を確認することができた。3) SDCでの個人差変動は，実際の着衣量でのそれに比し，95%棄却限界の上限と下限の差で，成人は24.7%，学童は6.9%縮小した。しかしなお存在する快適性を得るための着衣量の差は，他の個人要因によるものであろう。